

アレイダ・ゲバラさんが取り持つご縁

佐久総合病院祭「子ども館」で「いっしょに絵を描こう」のお手伝い

出町千鶴子（画家）

★昨年の絵は病院の託児所に展示

昨年に引き続き、今年も長野県の佐久総合病院の病院祭（5/21～22）「子ども館」の催しのお手伝いに行ってきた。

2008年に初来日されたアレイダ・ゲバラさんを佐久総合病院にご案内したのがきっかけで、佐久総合病院の地域医療、農村医療の取り組みを知り、感動。何かお役に立ちたいと、2010年、作品「Good-アフタヌーン」（98年ハバナ美術展／キューバ共和国政府文化大臣賞を受賞）を寄贈しました。それがご縁で、病院祭で子どもたちと絵を描く催しのお手伝いをするようになりました。

「さて、今年の絵のタイトルと内容は如何でしょうか。」

3月の下旬、副院長の牛久英雄先生（小児科）から、昨年の病院祭で子どもたちが描いた「赤い地球」の展示してある「ガーコの家」（病院託児所）の子どもたちの写真と一緒に、連絡をいただきました。東日本大震災から1週間ほど経った頃でした。佐久総合病院では、即刻、救援医療の活動が開始され、先生たちも交代で東北に出かけているということでした。世界中が胸を痛み、日本中が未来への不安に慄き、安全に不自由なく暮らせている人たちまでが右往左往してスーパーマーケットの棚が空っぽになるという異常事態の頃です。

「ガーコの家」の子どもたちの笑顔は、ぴかぴかきらきらと輝いていました。笑顔を眺めながら、今年のテーマは、「笑顔……嬉しい時の顔、楽しかった時の顔……自画像を描こう！」と決めました。たくさんの可能性を持っている子どもたち、その小さな手にどんな未来の種をにぎりしめているのだろうか……と想いを馳せながら。

★笑顔でいっぱい

「いっしょに絵を描こう」は、5月21日（土）午後2時から開始。少し早めに「子ども館」に到着したつもりでしたが、すでに、会場では、賑やかな子どもたちの声が響いていました。いくつかのテーブルでは絵を描いている子どもたちがいました。昨年参加してくれた男の子の顔も見えました。

広げられた円い大きな紙（直径180cm）を、わくわくしながら囲んでいる子どもたちの目の輝き、膝の上でしっかりと握られた拳……元気な笑顔が飛び跳ねていました。この光景に、私の胸もわくわくしてきました。

午後2時、「それでは始めましょう」。牛久先生の合図で、一斉に描き始めた子どもたち。1歳の男の子は、お父さんのお膝の上でお父さんと一緒に描きました。お互いの出来栄にニコニコと確認し合いながら描いていた女の子たち。近くの大人に相談しながらゆっくり描き進めていた男の子。両手に包帯を巻いた小さな女の子は、最後までしっかりと取り組みました。素晴らしい集中力でした。手のひらに絵具を塗って描いた清水君は、仕上げにお父さんのトラックも描きたいと言いました。お父さんが大好きなんだね。ギャラリーのお父さんも満面の笑顔で嬉しそうでした。（後の牛久先生のお手紙に、将来、彼は画家になるかもしれませんね。と書いてありました）

昨年より、いっそう賑やかに元気に描いた絵は、素直に嬉しく楽しさが伝わってきます。みんなの笑顔が円い地球の上で仲良く弾んでいます。今年も佐久の子どもたちの元気な笑顔に喜びをたくさんいただきました。参加してくださったみなさん、ありがとうございます。感謝申し上げます。牛久先生から「来年もぜひ、よろしく」と、再会の約束をしました。今から、みなさんと会える日を楽しみにしています。

多忙な状況な中で、準備を進めてくださった牛久先生と看護師のみなさん、お世話になりました。そして、ギャラリーで見守ってくださったお母様お父様をはじめご家族のみなさん、応援ありがとうございます。お手伝いに同行してくださった織座農園の窪川典子さん、中村易世さん、水品朱美さん、お疲れ様でした。

今回制作の絵は、希望のあるところに寄贈したいそうです。「Good-アフタヌーン」は、外来受付ホールに展示されています。近くに行かれる機会がありましたら、ぜひ、ご覧ください。

